

# 瀋陽だより

2015年 8月号

## 日本の学校で見かけないもの

東北育才学校 高井 奈央子

東北育才学校は東北三省でも屈指の進学校です。他の学校に比べると、予算の配分もかなり配慮されていると聞きます。確かに、種々の設備にはとてもお金がかかっているのが分かります。今月はその中で、日本の学校では見かけないものをいくつか紹介したいと思います。

### 1.職員専用の食堂

日本の高校では、職員・生徒兼用の食堂がある学校はありますが、職員専用のものとなると、さすがにないのではないのでしょうか。

日本よりもはるかにクラス数に対する教員数が多いので、昼時にはあっという間に満席になります。

朝食は朝 7:00-7:30、有料ですが、大体 2-3 元 (40~60 円ぐらい) もあれば十分な量を食べることができます。「朝食は外食」ということが珍しくないお国柄のせいかな、小さなお子さんを連れて一緒に朝食を取る職員の姿も見られます。

昼食は無料です。小学校は一足早く休みに入ったらしく、7月下旬になると、よくお子さんを連れて食事をして、子どもたちはそのまま学校で親が仕事をしているのを見ているという光景もよく見かけました。微笑ましいですね。

「教師の日」や「年末最後の営業日」など、特別な日には、いつもより豪華なメニューが並びます。

高等部にも職員専用の食堂があり、生徒用食堂は全く別の建物に設置されています。そちらに行ったことはないのですが、あまりにも人数が多くて、皆立っただま食べているとか。高等部の生徒たちが「先生も一度生徒用の食堂に来てください。私たちの苦しみを是非一緒に」と言っていたので、メニューも職員用とはだいぶ違っているものと予想されます。



## 2. 防犯設備

防犯に対する意識は、日本とかなり異なります。中学部では、朝、保護者と手をつないで登校する生徒の姿を良く見かけますが、それは誘拐ビジネスが現実的な脅威として生活の中にあるからなのだそうです。

東北育才学校でも、中学部・高等部ともに校門は閉ざされているのが普通で、必ず門のところにガードマンがいます。顔見知りになれば、すぐに通してくれるのですが、人員が入れ替わって初めて会う人だと、大抵「あなた、何しに来たの」と聞かれます。

大学でも同様の警備システムが入っているため、大学で不特定多数を招くようなイベントを実施することは極めて困難です。

一度、日本語スピーチコンテストを大学でという話が持ち上がりましたが、そのために特別にガードマンを雇わなければならないということになり、結局ホテルで大会を開催することになりました。

田舎育ちなので、寮の廊下や教室にカメラがあることに最初は面喰ったのですが、今はすっかり慣れてしまいました。「ここはきちんとした施設だ」という証でもあるのだと思います。



## 3. 室内プール

高等部には何と室内プールがあります。体育館と隣接していて、シャワーコーナーもあるという驚きの学校設備です。昼休みには体育館やプールで運動した先生方が、シャワーで汗を流して午後の仕事に向かいます。

プールは生徒も使用可能です。尤も、寮が5～6人で一部屋という環境なので、ここでシャワーを浴びるということが目的の場合もあるようです。

確かに、私の寮のシャワーも、あまり長い間使っていると、冷水になってしまうので、寮のシャワーを複数で使うときは、一日に1～2人が限界でしょう。

しかし、こういった物理的なことよりも重要なのは、「1時間45分の昼休み」の存在なのかもしれません。外食するもよし、生徒のようにファーストフードの出前を頼むもよし。食事の後はゆっくり休むことができます。

育才外国語学校では昼寝の時間も設けられているそうです。



## 瀋陽故宮



地下鉄に乗って「中街」で下車、繁華街とは逆の方向に歩いていくと、次第に黄色い屋根瓦のレトロな建物が橋の向こうに見えてきて、やがて瀋陽故宮にたどり着きます。

瀋陽は、中国最後の王朝・清の前身である後金の都城「盛京」と定められた都市で、その中心部にはかつての皇帝の居城・政治の中心であった「故宮」が存在します。

のちに清王朝は北京に遷都したため、現在中国本土には、北京と瀋陽、2か所に故宮が存在しています。

中国人の先生に、「瀋陽故宮に行こうと思うんです」というと、「台湾の故宮もいいですよ」という返事がかえってきました。この会話が示す通り、主だった宝物などは海の向こうの故宮博物院に収蔵されていますが、流石は皇帝の居城、精緻な細工が施された彫刻などは、迫力がありました。

後金・清王朝時代の展示物がメインで、大勢の観光客があちこちで写真撮影をしていました。門に至るまでの街道の両サイドには、お土産や食べ物を売る屋台が並び、盛んに客を呼び込んでいる活気あふれる観光スポットでした。

扁額には漢字と、満州文字が併記されています。

清王朝のルーツは草原の遊牧民で、世界史の教科書では征服王朝の一つに数えられています。この宮殿も建築様式も、漢民族と満州民族のスタイルが融合したものになっているらしく、独特の雰囲気を出していました。

この大清門から入って右に曲がると、左右に十王亭が並ぶエリアになり、その奥に大政殿がどっしりと構えていました。この組み合わせは、清朝の軍事制度「八旗」を象徴しているとも言われています。



建物の至る所に、皇帝の象徴である龍の彫刻が施され、柱や玉座に至ってはびっしり隙間なく龍やそのほかの吉祥紋でおおわれていました。

こういった予算を度外視した芸術品は、絶対的な権力がなければ出現しないものなのかもしれません。

権力者たちが自らの威容を誇るために必要であったであろう芸術

は、権力者とともに表舞台から去るものなのではないでしょうか。しばしば昔の芸術品のキャプションには「今の技術では再現不可能」という説明がついています。瀋陽故宮もその中の一つなのかもしれません。

そのほかにも、崇政殿・清寧宮・鳳凰楼など数多くの建物が公開されています。皇帝とその妃たちの寝室や、儀式を行ったとされている部屋も見ることができました。

後日気が付いたのですが、この瀋陽故宮には『四庫全書』を収めた文溯閣もありました。予習不足で大事なものを見忘れてしまったのですが、後の祭りでした。